

追悼文

名誉会員，福村晃夫先生のご逝去を悼む

名誉会員 阿部圭一

本学会の名誉会員、福村晃夫先生は2016年12月5日にご逝去されました。深く哀悼の意を表します。

福村晃夫先生は、本学会の前身の一つである日本社会情報学会（JSIS）が1996年4月に創設されたとき、初代副会長の一人を務められました。創設時の会長は田中一先生、副会長2人が高木教典先生と福村晃夫先生というトロイカ体制の執行部でした。田中先生は何ごとにも積極的で、時には走りがちなところを、高木・福村の両副会長が必要なきにはブレーキをかけつつ、JSISの基礎固めをし、その後の発展へと結びつけたのだと思います。特に、福村先生は「温和」という言葉がぴったりする方で、JSIS内でも対外的にも円滑な人間関係の樹立に貢献されました。

次に、筆者と福村晃夫先生との関係を述べます。私は、卒業研究以来ずっと福村先生にご指導いただきました。私が1962年に名古屋大学工学部電気学科で卒業研究の指導教官を選ぶとき、今で言う情報関係の分野を選ぼうと考え、福村研究室に決めました。当時、福村先生は研究テーマを音声学からオペレーションズ・リサーチに変えようとされていました。これはと思って福村先生のもとを叩いたわけです。当時は、まだ「情報工学」という言葉すらありませんでした。

卒業研究では、分厚い訳書を手渡され、それに挙げてある文献を芋づる式に読んでいきました。そのうちに、この問題をこのように解いたら解決できるのではないかというアイデアが出てきました。福村先生に「私の卒研はこれをやらせてください」とお願いして、認められました。やってみたら、どうしてもうまくいきませんでした。ある規模まではうまく行くのですが、それを超えると反例が出てくるのです。福村先生はそれを予想しながら「やってみろ」とおっしゃったのだと思います。ですから、私の卒論は「こういう問題をこうすれば解決すると考えたが、こういう理由で失敗しました」という内容です。

修士課程・博士課程と指導していただき、私が静岡大学に移動した後も、陰に陽にバックアップしていただきました。1995年10月に新設された静岡大学情報学部の初代学部長に選出され、文工融合の情報学を目指すという旗を振りました。そのこともあって福村先生からJSISへの参加を勧められ、設立当初からの会員となっています。JSISおよびその後継の社会情報学会から私が得たものは計りしれません。その点でも、福村先生に深く感謝しています。

あらためて、心からご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

